



週刊新潮 差別的コラム波紋

「週刊新潮」の連載作家の高山正之さんが発表したコラムが波紋を広げている。外国にルーツがある人に「日本名を使つな」などとした記述が差別的と批判を浴びた。朝鮮半島にルーツを持つ日本国籍の作家・深沢潮さんはコラムで名指しされたことを受けて抗議し、出版元の新潮社は公式サイトで謝罪。コ

ラムは連載終了に追い込まれたが、深沢さんは同社との出版に関する契約を解消する意向を示した。そうしたコラムが、多くの人の目に触れる雑誌に、なぜ掲載されたのか。社会やメディアは、差別的な表現にどう向き合い、対処すべきなのか。メディアの現場に詳しい二人に話を聞いた。

潜在化した偏見、リアルに学ぶ機会

私の理解では、問題となったコラムで高山正之さんが書いたのは「外国にルーツがある人間は日本社会に口を出すな」ということです。誰かを排除することで社会は成り立つ――という排外的な論理に連なるものであり、非常に醜悪なものを見た気がしました。

コラムは外国にルーツがある人に「日本名を使つな」と告げています。在日コリアンの人の通称名を、あたかも格闘技のリングネームのように捉えているのではないか。いかに通称名にすがらざるを得なかったか、という心情や歴史的背景を理解しようとしていないか、想像すらできない



のか。
名前とは、それぞれの人が生き方を託す大切なものです。在日コリアンの人たちが本名ではなく通称名を使わざるを得なかったのは、そんな社会をつくり出した側、つまり日本社会の問題です。
私は差別の現場を長く取材してきました。ヘイトデモが

最も激しかったのは2013〜14年ごろ。街頭で特定の国を挙げて「死ね」「殺せ」と叫ぶ演説に、100人も200人も集まっていた。
それは今、だいぶ小規模になりましたが、差別や偏見が減ったわけではありません。もはや街頭での激しい言葉を必要としないほど、人々の内

やすだ・こういち 1964年静岡県生まれ。「ネットと愛国」で講談社ノンフィクション賞。「ルポ 外国人『慧鷹』労働者」で大宅壮一ノンフィクション賞。「地震と農殺 1923―2024」で毎日出版文化賞特別賞。

面に偏見が定着してしまったのかもしれない。むしろ背筋がぞくぞくするのは、例えばスーパー銭湯で隣り合った若者が、あるいは酒場の主人が、おもむろに外国人差別を口にするような瞬間です。
差別や偏見が潜在化したからこそ、表に出た言葉がすぐにはベイトと気づかないほどに、社会もメディアも感性がすり減っているのではないか。今回のコラムが日本を代

表する週刊誌に掲載され、深沢潮さんが声を上げるまで問題にされなかったことも、一つの表れではないでしょうか。

かつての週刊誌には「敵とするのは強い権威や権力」という、小さくないプライドがありました。高山さんと週刊新潮がやったことは、抗弁するずべを持たないマイノリティーを相手に選んだ「絶対に勝てるけんか」のようなもの。めっちゃくちゃ格好悪い。

差別は被害者を傷つけるだけでなく、社会や地域をも破壊します。マイノリティーの人たちは日本にずっといました。日本社会は今、きちんと対峙してこなかった差別と、いつものに直面し、うるたえっているように見えます。差別や偏見のリアルな状況を前に学ぶ機会を与えられているとも言えます。

上の文を読んで、下の問いに答えましょう。

1 傍線部①に対して、筆者は、日本名を使わざるを得なくしているのはどこに問題があると言っていますか。本文中から4文字で抜き出しましょう。

--	--	--	--	--

2 傍線部②へイトデモが小規模になった理由を筆者はどう考えていますか。本文中から1文で抜き出し、最初の3文字を書きましょう。

--	--	--	--	--

3 偏見や差別が広がると、どんなことが起こりますか、本文中から1文で抜き出し、最初の3文字を書きましょう。

--	--	--	--	--

NIEワークシート
中～高校

NIEワークシートのこたえ（2025年9月30日公開）

◆ワークシート「差別や偏見潜在化(社会)」
2025.9.25付 朝刊 11面 解答

- 1 日本社会
- 2 もはや
- 3 差別は